創世記10－11章「分かれ出た諸国民」

1A 国民の分かれ 10

1B ヤフェテ 1－5

2B ハム 6－20

1C ニムロデ 6－12

2C ペリシテ 13－14

3C カナン人 15－20

3B セム 21－32

1C エベルまで 21－24

2C 二人の息子 25－32

2A 散らされた民 11

1B ことばの混乱 1－9

2B セムからアブラハム 10－26

3B 父テラの家 27－32

本文

創世記 10 章を開いてください。私たちは、6 章から 9 章までにかけて、ノアの時代の大洪水について読みました。そして 10 章と 11 章で、その息子、セム、ハム、ヤフェテの子孫について見ていきます。思い出していただきたいのは、主は、ご自分の預言によって、救いが女の子孫から出てくるということです。「3:15 わたしは敵意を、おまえと女の間に、おまえの子孫と女の子孫の間に置く。彼はおまえの頭を打ち、おまえは彼のかかとを打つ。」ですから、10 章と 11 章で、その子孫について、具体的な息子たちの名前と民族、氏族の名前が列挙されていきます。

しかし、そこには、神ご自身の約束への期待が込められているということを忘れないでください。11 章の最後には、アブラム、すなわちアブラハムの名が出てきます。マタイ 1 章 1 節、アブラハムの子孫、イエス・キリストへの系図につながるのです。そういった、大局的な見方から、眺めてみたいと思います。

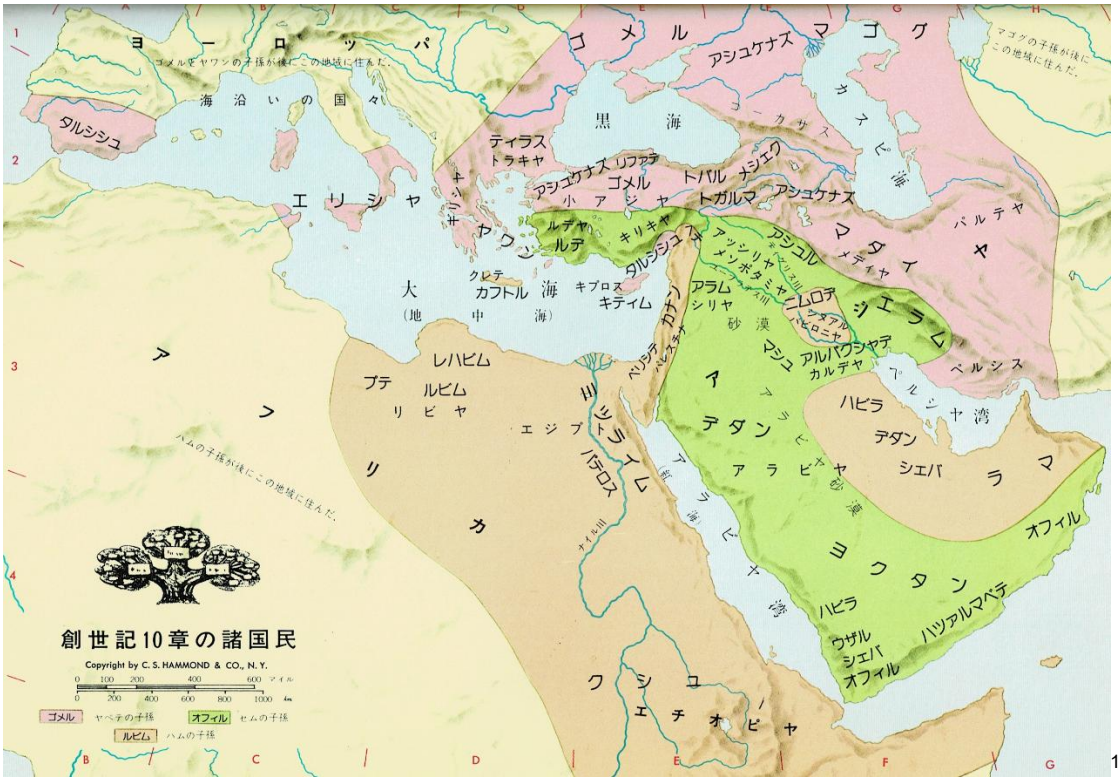
1A 国民の分かれ 10

1B ヤフェテ 1－5

1 これはノアの息子、セム、ハム、ヤフェテの歴史である。大洪水の後、彼らに息子たちが生まれた。

創世記の書き方の形体が出てきましたね。「経緯」とか「歴史」という言葉です。6 章 9 節には、

「これはノアの歴史である」とあり、5 章 1 節「これはアダムの歴史の記録である」とあります。そして 2 章 4 節に、「これは天と地が創造されたときの経緯である」とあります。



[1]

[2] ヤフェテの子らはゴメル、マゴグ、マダイ、ヤワン、トバル、メシェク、ティラス。[3] ゴメルの子らはアシュケナズ、リファテ、トガルマ。[4] ヤワンの子らはエリシャ、タルシシュ、キティム、ドダニム。

ヤフェテの子らの名前です。その子たちから諸国民が分かれ出ます。この創世記 10 章は、単に子孫の名を書いているだけでなく、その子孫の名にそった氏族、民族、そして国になっていく名前が出て来ています。それで、その分布図があるのです。

「ゴメル」はアナトリア半島、今のトルコにいます。新約聖書ではガラテヤであるとか、カッパドキアとかの地域になります。そして、この地図では、そして小さくですが、ヨーロッパにゴメルが移り住んでいることが書いてあります。ゲルマン人とか、後の欧州にいる民族となっていきます。ゴメルの息子にアシュケナズがいますが、元々はアナトリアにいましたが、「アシュケナージ系ユダヤ人」と呼ばれる人々が、いわゆる世界離散後、欧州に移り住んだユダヤ人のことを言います。

「マゴグ」は、今のロシア南部、黒海とカスピ海の間あたりに移り住みます。「マダイ」は、後のメディア人と呼ばれる人々です。カスピ海の東に移り住みました。「ヤワン」は、ギリシア系のイオニ

[1] 「聖書地理」チャールズ・ファイファー著　いのちのことば社

ア人ですね。ギリシアなど欧州に移り住みました。「トバル、メシェク」ですが、アナトリアの東部にいたと言われています。そして、ヤワンの子「エリシャ」もギリシアで、「タルシシュ」はスペインの方に動いています。タルシシュの名は比較的、知られていますね。ヨナが乗った船は、タルシシュ行きでした。地中海のはるか遠くにあり、当時のイスラエルの人々にとっては、地の果てのようなところです。そして、「キティム」は、東地中海に浮かぶ、キプロス島のことです。バルナバとパウロが、第一次宣教旅行の時の訪問地がキプロスでしたね。

こうやって見ると、ヤフェテの人々は欧州とロシア南部に住んだ、いわゆる白人系の人々であることがわかります。そして興味深いことに、これらの子孫がエゼキエルの預言に数多く出てきます。27 章では、ツロに対する預言で、ツロが貿易をしている相手国として、タルシシュ、ヤワン、トバル、メシェク、ベテ・トガルマなどが出てきます。そして 38 章です、有名なゴグとマゴグの戦いです。「メシェクとトバルの大首長である、マゴグの地のゴグ」に対する預言です。そして、とありますね。北の果てから、ゴメル、ベテ・トガルマなどの軍隊が来ると言っています。ここら辺の人々は、スキタイ人（コロ 3:11）とも呼ばれる、いわゆる騎馬民族の人々です。

5 これらから島々の国民が分かれ出た。それぞれの地に、言語ごとに、その氏族にしたがって、国民となった。

この「島々の国民」というのは、地中海の島々のことです。今、モーセが書いていることを思い出してください。イスラエルの地から見た島々です。

そして大事なのが最後の言い回し、「それぞれの地に、言語ごとに、その氏族にしたがって、国民となった。」です。それぞれの言語があって、それで氏族になり、それから国民となります。（読み方を、「くにたみ」としているのは、おそらく、今の近代国家の国民ではないことを示したいからだと想像します。）元々は一つの言語で、一つの民であったのに、このように分かれたのです。11 章に、その経緯が書かれています。

2B ハム 6－20

1C ニムロデ 6－12

6 ハムの子らはクシュ、ミツライム、プテ、カナン。7 クシュの子らはセバ、ハビラ、サブタ、ラアマ、サブテカ。ラアマの子らはシェバ、デダン。

ハムからの息子たちです。「クシュ」は後々国の名前にもなり、今のエチオピアやスーダンのところに移り住みます。そして、「ミツライム」ですが、これはエジプトです。エジプトに旅行に行った時に、今でもミツライムから派生した言葉を使っていました。そして、「プテ」はエジプトの西、リビアです。

そして、クシュから出ている子らは、地図では、アラビア半島のペルシャ湾沿いの部分です。シェバと言えば、シェバの女王ですね。そして、エゼキエル 38 章の幻に、ゴグの率いる軍隊がイスラエルに攻めるのを、おかしいと言うのが、「シェバ、デダン」になります。

8 クシュはニムロデを生んだ。ニムロデは地上で最初の勇士となった。9 彼は主の前に力ある狩人
であった。それゆえ、「主の前に力ある狩人ニムロデのように」と言われるようになった。10 彼の王
国の始まりは、バベル、ウルク、アッカド、カルネで、シンアルの地にあった。

クシュの子ニムロデのしたことには注目です。彼が最初の勇士で、「主の前に力ある狩人」とありますが、これは全く良い意味ではありません。「主の面前に向かっている」とも訳せて、公然と反抗しているという意味合いがあります。事実、ニムロデという名前自体が、「反抗」というヘブル語から派生しています。

そして、彼が王国を造り始めました。その第一の町が「バベル」なのです。11 章で、ニムロデにある反抗的な姿について、見ていくことになります。そして、他にも町の名前が書いてありますが、「シンアルの地」です。これは一般的にはシュメールと呼びます。今のイラク南部、ユーフラテス川の下流地域です。

11 その地から彼はアッシュルに進出し、ニネベ、レホボテ・イル、カルフ、12 およびニネベとカルフの
間のレセンを建てた。それは大きな町であった。

「アッシュル」とありますが、これはアッシリアのことです。今のイラクの北部になります。そして、後にアッシリア帝国の首都となる「ニネベ」を建てたのも、ニムロデです。ここからよくわかりますね、後に、イスラエルに敵対し、滅ぼし、捕え移す帝国の都が、ニムロデが建てた町々ということです。神への反抗的な態度が、古代の時に既に植え付けられていました。このようにして、ニムロデが出てきて、それが、神の祝福命令に対して真逆に動くバベルの塔事件へとつながります。

そして、ここに実は、贖いの預言があります。主は、イスラエルに救いを与えられ、メシアを遣わされる預言をミカに行わせます。「5:2 ベツレヘム・エフラテよ、あなたはユダの氏族の中で、あまりにも小さい。だが、あなたからわたしのためにイスラエルを治める者が出る。その出現は昔から、永遠の昔から定まっている。」分かりますか？これは、イエスがベツレヘムでお生まれになることの預言です。そして、この方が地の果てまで力を及ぼすので、イスラエルの民は安らかに憩うとあります。そして、5 章 6 節には、こうあります。「彼らはアッシリアの地を剣で、ニムロデの地を抜き身の剣で飼いならす。アッシリアが私たちの国に来て、私たちの領土に踏み込んで来るとき、彼は、私たちをアッシリアから救い出す。」メシアによって救われた民がニムロデの地も征服します。

2C ペリシテ 13－14

13 ミツライムが生んだのは、ルディ人、アナミム人、レハビム人、ナフトヒム人、14 パテロス人、カスルヒム人、カフトル人。このカスルヒム人からペリシテ人が出た。

クシュから生まれたミツライムから出た氏族です。エジプトや北アフリカに移り住んでいます。それから、「ペリシテ人」が現れます。カフトル人やカスルヒム人は、地中海の島、クレテ島に住んでいたと言われます。ペリシテ人は、海洋民族であり、地中海沿岸に住み始めます。それが、私たちが目にしていく、イスラエルとの戦いの歴史なのです。アブラハムの時代からペリシテ人はそこに住んでいて、士師記ではサムソンが、サムエル記ではサウルとダビデが戦い、ダビデの時代に征服されます。

3C カナン人 15－20

15 カナンが生んだのは、長子シドン、ヒッタイト、16 エブス人、アモリ人、ギルガシ人、17 ヒビ人、アルキ人、シニ人、18 アルワデ人、ツェマリ人、ハマテ人。その後、カナン人の諸氏族が分かれ出た。

先週の礼拝説教でお話しした、カナンの子孫です。シドンが長子ですが、シドンという町が今のレバノンにできます。ここは一般的にはフェニキア人と呼ばれます。そして、ヒッタイト人ですが、トルコでヒッタイト王国ができます。けれども、イスラエルの沿岸地域にも住み始めます。そして、ここにいる、エブス人、アモリ人、ギルガシ人、ヒビ人など、約束の地としてアブラハムに与えられるところに、住んでいた人々です。彼らがカナン人です。

19 それでカナン人の領土は、シドンからゲラルに向かって、ガザに至り、ソドム、ゴモラ、アデマ、ツェボイムに向かって、ラシャにまで及んだ。20 以上が、その氏族、その言語、その地、国民ごとの、ハムの子孫である。

ゲラルは、ずっと南、後にユダ族の割り当て地の一部になりますが、北から南に向かって、その一体がカナンの地です。今、有名になっているガザは、イスラエルの南、海岸地域ですね。さらに、東に拡がるのが、ソドムやゴモラです。死海の東にもカナンの子孫が広がります。そして、ソドムとゴモラが、その罪が積み上がって神によって滅ぼされる町になるのです。

そして、ヤフェテの時と同じく、6 節から 20 節のハムの子孫の箇所も、息子の名前だけでなく、氏族の名前、言語にしたがった名前、土地、そして国民に従った名前で分類されています。

3B セム 21－32

1C エベルまで 21－24

21 セムにも子が生まれた。セムはエベルのすべての子孫の先祖であり、ヤフェテの兄であった。

ノアは、セムに対して祝福の預言をしていました。「ほむべきかな、セムの神、主。（9:26）」何よりも、セムの子孫から救いが、メシアが現れるからです。

「エベルのすべての子孫の先祖」とのことですが、このエベルが派生して、「ヘブル人」と呼ばれます。「エベル」の名前の意味は、「越える」です。ユーフラテスを越える、という意味があります。アブラハムは、ウルから、神に呼び出されて出て行き、そしてユーフラテス川を渡ってカナン人の地に行きました。そのウルは、ニムロデが建てたバベルなどの町がある、シンアルの地にあります。ですから、主に反抗し、偶像礼拝を行っているところから、主なる神に呼ばれて、神を礼拝するエルサレムの都へと移り住む、という意味合いがあるのです。

22 セムの子らはエラム、アッシュル、アルパクシャデ、ルデ、アラム。23 アラムの子らはウツ、フル、
ゲテル、マシュ。24 アルパクシャデはシェラフを生み、シェラフはエベルを生んだ。

ここは、息子たちの名前になっています。ただ、「エラム」は、国の名前にもなりました。今のイランにありました。ペルシアの前の国です。そして、「アラム」はシリアの古代名になります。アブラハムの親戚、リベカや兄のルベンが住んでいたのは、アラムであります。

2C　二人の息子　25－32

25 エベルには二人の息子が生まれ、一人の名はペレグであった。その時代に地が分けられたから
である。彼の兄弟の名はヨクタンであった。

ペレグは、「分かれる」という意味から派生しました。そして、「その時代に地が分けられた」とあります。これについて、10 章の中に、「分かれる」という言葉が数回出てくるので、注目します。「10:5 これらから島々の国民が分かれ出た。それぞれの地に、言語ごとに、その氏族にしたがって、国民となった。」国民が分かれ出た、という意味で使われています。18 節では諸氏族が分かれ出たとあり、32 節、最後には「もろもろの国民が地上に分かれ出た」とあります。そして 11 章で、バベルの塔の事件があって、人々が地の全面に散らされたことが書かれています。ですから、ペレグの時代に、バベルの塔の事件があったと解釈できます。

あるいは、そのまま文字通り、地殻変動が起こって、大陸が分かれたというようにも解釈できるでしょう。もしそうなれば、今の地図を見ると、ペルシャ湾、紅海、また、地中海でさえもが、両側の海岸線が若干似ており、元々は一つだったのではないか？と想像できるからです。

26 ヨクタンが生んだのは、アルモダデ、シェレフ、ハツァルマベテ、エラフ、27 ハドラム、ウザル、ディ
クラ、28 オバル、アビマエル、シェバ、29 オフィル、ハビラ、ヨバブ。これらはみな、ヨクタンの子であ
った。30 彼らが住んだ地は、メシャからセファルに及ぶ東の高原地帯であった。

エベルには、ペレグとヨクタンが生まれましたが、まずヨクタンの子孫についてモーセは書いています。なぜなら 11 章で、バベルの塔の事件の後に、ペレグから出た子孫について、系図を書き記すからです。

ヨクタンの子孫は、大まかにはアラビア半島の南、今のイエメンがあるところです。知られているのは「オフィル」です。半島の南にあり、金が採掘されるところとして聖書に出てきます。

31 以上が、その氏族、その言語、その地、国民ごとの、セムの子孫である。32 以上が、それぞれの家系による、国民ごとの、ノアの子孫の諸氏族である。大洪水の後、彼らからもろもろの国民が地上に分かれ出たのである。

31 節は、セムの子孫について、そして 32 節は、10 章の初めから、ヤフェテ、ハム、セムの子孫すべてについてです。ノアは、一つの家族、一つの言葉ですが、なぜ、今、これだけ世界にもろもろの国民に分かれ出ているのか？ということです。それが明確に説明しているのが、11 章、バベルの塔です。

この章が大事なのは、これが下地になって、世界が国民という単位で神が働きかけるということです。12 章から、アブラハムが呼ばれて、強い国民になると約束されて、そして、「地のすべての部族は、あなたによって祝福される」と約束されます（3 節）。そして、福音は「あらゆる国の人々を弟子としなさい。（マタイ 28:19）」となります。そして、使徒の働きは、異邦人への宣教が強調され、それは諸国民への宣教ということです。

それが黙示録では、あらゆる国語、部族、国民の中から贖うということが強調されているのです。「5:9 彼らは新しい歌を歌った。「あなたは、巻物を受け取り、封印を解くのにふさわしい方です。あなたは屠られて、すべての部族、言語、民族、国民の中から、あなたの血によって人々を神のために贖い」とあります。

2A 散らされた民 11

1B ことばの混乱 1－9

1 さて、全地は一つの話しことば、一つの共通のことばであった。

ここで、モーセは、「もろもろの国民が地上に分かれ出た」と言った直後にこれを書いているのは、「元々、一つの話ことばだったのだよ、共通のことばだったのよ」ということなのです。なぜ分かれ出たのかの説明をこれからしていきます。

2 人々が東の方へ移動したとき、彼らはシンアルの地に平地を見つけて、そこに住んだ。

東の方とは、箱舟がとどまったアララトの山地から東でもあるし、またモーセのいるところ、モアブの草原のところからも東です。シンアルが「平地」なので、そこに住み始めました。けれども、思い出してください、ノアと家族を祝福して、「生めよ。増えよ。地に満ちよ。(9:1)」と命じられていたのです。地に満ちないといけません。ところが、留まって、一緒に住み始めました。

3 彼らは互いに言った。「さあ、れんがを作って、よく焼こう。」彼らは石の代わりにれんがを、漆喰
の代わりに瀝青を用いた。4 彼らは言った。「さあ、われわれは自分たちのために、町と、頂が天に
届く塔を建てて、名をあげよう。われわれが地の全面に散らされるといけないから。」

ここに、「さあ」という言葉、また、「われわれは」という言葉がありますね。一緒になって、一つになってということです。これは、神を恐れて、神に従い、神の前にへりくだるのではなく、神の言われることに反対、反抗しているのです。「われわれが地の全面に散らされるといけないから」ということで、地に満ちよと正反対のことをしています。世の終わりには、詩篇第二篇にあるように、国々が立ち構えて、王たちが相ともに集まって、主に対抗するのですが、ここで、まさにこのことを行っています。これが、まさに「世」というものの始まりです。みなで神に反抗する体制です。

家を煉瓦で作って、よく焼いて、瀝青を使っているのは、「神が水の裁きを与えられたけれども、我々は洪水が来ても、自分たちを守るぞ！」と言っているようなものです。それで自分たちで安全を確保して、それから、自分たちのための町を造るぞ、そして自分の名をあげるのだ、とします。神を受け入れない人間は、必ず、このように自分自身を頼りにして、神がするとおっしゃっていることを拒んで、自分でやっていこうとします。自分の尊厳も、自分の努力や力によって獲得するのだ、という感じです。

そして、ついに「頂が天に届く塔」と言っています。つまり、これは神に自分たちが届く、と言っているようなものです。もう神のいる世界は要らないのだ、人間が何でもできるのだから、というおごりです。どれだけ、世界がそのような奢りで成り立っていることでしょうか！

サタンがこの奢りによって、天のおるべき領域から落とされました。バビロンの王に対する預言ですが、その背後にいる天の存在、明けの明星に対して神は宣言されました。「イザ 14:12-14 明けの明星、暁の子よ。どうしておまえは天から落ちたのか。国々を打ち破った者よ。どうしておまえは地に切り倒されたのか。13 おまえは心の中で言った。『私は天に上ろう。神の星々のはるか上に私の王座を上げ、北の果てにある会合の山で座に着こう。14 密雲の頂に上り、いと高き方のようになろう。』」わたしが、わたしが、となっていますね。

真のへりくだりは、「神が、神が」となることです。パウロが、神のご計画のすばらしさに圧倒されて、こう言いました。「ロマ 11:36 すべてのものが神から発し、神によって成り、神に至るのです。

この神に、栄光がとこしえにありますように。アーメン。」

[5] そのとき主は、人間が建てた町と塔を見るために降りて来られた。

「人間が建てた町と塔」とありますね。シンアルの地、ユーフラテス川流域には、アブラハムの故郷、ウルにも見つかっていますが、ジグラトというピラミッドのような建物の遺跡が発掘されています。その頂上に行くことは天に行くことで、そこで神に会えると信じられていました。

しかし、それは所詮、人間の作ったものです。天に届くと豪語していましたが、天におられる主は、あまりにも低いので、降りてこないといけなかったのです！これが、人のおごりの実際です。自分はこれだけできるとうぬぼれます。けれども、神から見たら、その力と知恵は無に等しいのです。

[6] 主は言われた。「見よ。彼らは一つの民で、みな同じ話しことばを持っている。このようなことをし始めたのなら、今や、彼らがしようと企てることで、不可能なことは何もない。[7] さあ、降りて行って、そこで彼らのことばを混乱させ、互いの話しことばが通じないようにしよう。」[8] 主が彼らをそこから地の全面に散らされたので、彼らはその町を建てるのをやめた。

これが、主がことばをバラバラにされた理由です。一つの民、一つのことばを持っていたら、不可能なことは何もなくなるからだということです。つまり、神へのおごり、その欲望はとまらなくなるということです。今や、AI 技術で言葉の壁を克服しようとしていると豪語する人たちもいます。それで、人々は神のようになれるのでしょうか？いいえ、人間が技術でできるようになると、ますます、混乱と混沌は進みます。

建設現場で、互いのことばが、突如、分かれてしまいました。どんなに話しても、聞き直しても通じません。それで、建設を途中でやめて、それで散り散りになりました。それぞれの家族は同じ言語だったのでしょう。それで、彼らは無理やり、別々に暮らさないといけなくなりました。それで、彼らは強いられて、地に満ちて行ったのです。世界に国民ごとに分かれ出て、住んでいるのはこのためです。そして、言葉が分かれているので、私たちに制約がかかっています。けれども、その代わりに、国があります。同じ言語でつながる国があります。

初めから聞いておけばよかったのです。従順になれば、それぞれ一つのことばでいられたのです。けれども、強いられる時は、このように痛い思いをしなければいけません。結局、同じように世界に満ちるのであれば、主体的に従順になって、祝福されればよかったのです。

[9] それゆえ、その町の名はバベルと呼ばれた。そこで主が全地の話しことばを混乱させ、そこから主が人々を地の全面に散らされたからである。

「バベル」は、混乱という意味です。そしてこれがバビロンと同じ言葉です。バビロンは、ここバベルの町から始まり、次に、イスラエル人を約束の地から引き抜き、神殿を破壊するバビロンとして現れ、最後に終わりの日に、聖徒たち、預言者たちを踏みにじって、世界の富をもって酔いしれる大淫婦の女として現れます。

しかし、ここにも福音による贖いが見えてきます。先ほど、諸国民に分かれたけれども、そこにアブラハムへの約束があり、そしてメシアがすべての国民を弟子とするという命令を出され、世の終わりには、天において諸国民が神を賛美しているところを見ました。

それは、エルサレムにいる弟子たちが、福音を宣べ伝えるところから始まったのですが、それは五旬節の時、世界中のユダヤ人たちが、それぞれの言語を話すユダヤ人たちがエルサレムに集まった時に、弟子たちに聖霊が降ったところからなのです。彼らが異言、それぞれの外国の言葉で、神を賛美しはじめたところから始まるのです。言葉はバラバラにされましたが、聖霊の賜物、異言のしるしによって、御霊において私たちは一つになれるのだということを知らされました。

2B　セムからアブラハム　10－26

10 これはセムの歴史である。 セムは百歳のとき、アルパクシャデを生んだ。それは大洪水の二年後のことであった。

ここから再び、新たな歴史が始まります。「セムの歴史」です。

11 セムはアルパクシャデを生んでから五百年生き、息子たち、娘たちを生んだ。12 アルパクシャデは三十五年生きて、シェラフを生んだ。13 アルパクシャデはシェラフを生んでから四百三年生き、息子たち、娘たちを生んだ。14 シェラフは三十年生きて、エベルを生んだ。15 シェラフはエベルを生んでから四百三年生き、息子たち、娘たちを生んだ。16 エベルは三十四年生きて、ペレグを生んだ。17 エベルはペレグを生んでから四百三十年生き、息子たち、娘たちを生んだ。

先ほど見たように、セムからエベルまでの系図があり、そしてエベルに二人の子が生まれ、その一人、ヨクタンの系図は読みました。ここからはペレグの系図なのです。

18 ペレグは三十年生きて、レウを生んだ。19 ペレグはレウを生んでから二百九年生き、息子たち、娘たちを生んだ。20レウは三十二年生きて、セルグを生んだ。21レウはセルグを生んでから二百七年生き、息子たち、娘たちを生んだ。22 セルグは三十年生きて、ナホルを生んだ。23 セルグはナホルを生んでから二百年生き、息子たち、娘たちを生んだ。24 ナホルは二十九年生きて、テラを生んだ。25 ナホルはテラを生んでから百十九年生き、息子たち、娘たちを生んだ。26 テラは七十年生きて、アブラムとナホルとハランを生んだ。

徐々に、寿命が少なくなっていますが、ここまで書いて、ついにアブラハムの名前、当時はアブラムですが、出てきました。彼はナホム家の中におり、父がテラです。

3B　父テラの家　27－32

27 これはテラの歴史である。 テラはアブラム、ナホル、ハランを生み、ハランはロトを生んだ。

次に、また新たな歴史、「テラの歴史」が始まります。テラは三人の息子がいました。そして、ロトについてモーセは書き記しています。彼はアブラハムと旅を共にして、後にソドムから救われることになり、けれども娘との間に子をもうけて、アンモン人とモアブ人が出てくる、というところまで彼の名が出てきます。

28 ハランは父テラに先立って、親族の地であるカルデア人のウルで死んだ。29 アブラムとナホルは妻を迎えた。アブラムの妻の名はサライであった。ナホルの妻の名はミルカといって、ハランの娘であった。ハランはミルカの父、またイスカの父であった。

三人の息子のうち、ハランは父よりも先立たれてしまいました。しかし、死ぬ前に娘を生んでいました。その中の一人、ミルカはナホルの妻になり、そこで生まれたのがベトエルという人で、ベトエルがリベカを生みます。後にアブラハムの息子イサクの嫁になる人です。

30 サライは不妊の女で、彼女には子がいなかった。

ここがとても大事な言葉になります。系図には、妻の名が書かれても、それは相続の子を生む文脈で書かれます。しかし、ずっと生まれないのです。この不妊というのが、後で生まれるイサクが、約束の子と呼ばれる所以になります。

聖書には、不妊を神が積極的に用いられることになります。リベカにもなかなか、子が生まれませんでした。そして、ヤコブの妻ラケルにも、なかなか子が生まれませんでした。ずっと先には、ハンナが不妊だったのですが、彼女がうめきの中で祈ったその願いが聞かれて、サムエルが生まれます。そして、ルカによる福音書には、バプテスマのヨハネの母エリサベツも、不妊で、けれども神の約束によってみごもったのです。

しかし、約束の女の子孫、メシアは、不妊どころか、男を知らない女から生まれます。そして、死んだのに、よみがえるというところで、確かに神の子であることが明らかにされます。無のところからの有、死んだような不妊から生を出す、そして処女からの誕生、そして死者からの復活ということで、神がいのち、復活の方であることが紹介されているのです。

[31] テラは、その息子アブラムと、ハランの子である孫のロトと、息子アブラムの妻である嫁のサライを伴い、カナンの地に行くために、一緒にカルデア人のウルを出発した。しかし、ハランまで来ると、彼らはそこに住んだ。[32] テラの生涯は二百五年であった。テラはハランで死んだ。

テラが、カナンの地に行くために、息子、息子の妻、そして孫を連れて旅に出ます。なんで、向かったのかは、12 章に書かれています。アブラハムに主が語られていたのです。けれども、ハランまでくると、そこに住んでしまいました。ハランは、ユーフラテス川の上流地域にある町で、今のトルコにあり、観光名所の一つです。そこに、留まってしまったのは、ヨシュア記を見ると、テラは、「ほかの神々に仕えていた（24:2）」とあります。偶像礼拝者だったのです。ハランは月の神を拝む町として有名でした。

それでテラが死ぬまで、そこに留まり、それから 12 章、アブラハムたちがテラの死後、主に命じられたところに出発したことが書かれているのです。そもそも、「あなたの親族、あなたの父の家を離れて」と命じておられました（12:1）。けれども父と共に出かけたので、ハランまでになってしまったのです。12 章以降で、アブラハムの信仰を学びます。彼の信仰が、全きものとは全然違うことを、私たちは見ていきます。それでも、彼は従ったのです。主が、私たちが中途半端だからといって、信仰の一歩を踏まないよりも、中途半端だけれども、それでも一歩踏み出すことを、祝福してくださるのを見ることができますね。

こうしてついに、創世記の話、アブラハムの生涯のところまで来ました。この学びの冒頭で、創世記は、世界の創造から、一気にアブラハムの生涯に焦点があてられることをお話ししました。主が、一つの民をばらばらにしましたが、その諸国民の中から、主に召し出された人から新たな国民を造り、それでアダムの時から抱いておられた、救いのみわざを行われるのです。ニムロデ、バベルの塔のように、神に対する反抗があっても、神はそれでもあきらめず、彼らのところまで降りて来てくださり、寄り添い、その散らされたところから救いを起こそうとしておられます。

神は人がどんなに失敗しても、それでもそこから起き上がらせ、新しいことを行われるお方なのです。